

# 五種法師についての一試論

望 月 海 淑

1

法華經の中において説かれる五種法師と一念信解とは、如説修行を唱える法華經の実践規範だ、といわれるのが常のようである。しかし、この両者の内容の並例だけをもって、法華經の実践規範の総べてだと即断することは出来ないであろう。

一念信解は分別功德品において説かれるものだが、これと似た内容だと思われるものに、法師品・随喜功德品等に説かれる一念随喜がある。この両者には関連があるものだろうか。

一方、五種法師は法師品・法師功德品・如来神力品等に示されている。しかし、法行は最初から五種類があったものではなくて、年とともにだん／＼と形成され来たものである、といわれる通りに、これが全てではなくて、その形は多様である。形の整って来たといわれる部分についても、五種法師から書写を除いたものを各所にみうるし、逆に、五種法師に供養を加えたものもあり、他人のために書写をすゝめるところもあり等々で五種法師とはいながらも実は六種法師であり、七種法師であるともいいうるであろう。

このことは、法華經の実践のあり方は五種法師であると即断することに対して疑を持たせるものではなからうか。

又法師品は一念隨喜を説くとともに五種法師を示しており、分別功德品の後には隨喜功德品と法師功德品とが存し夫々に一念隨喜と五種法師とを説示している。そこで、この法師品の説示は果して隨喜功德品や法師功德品とに引きつがれるべき内容上の性質をもっているものかどうかとの疑問も發生して来る。

そこで、この小論は、これらの点に対する考察の中で、特に五種法師とはどういうものか、という点に関する考究の跡を残そうとしたものがある。

## 2

五種法師が説かれている各品の中でも、一番に整理されているのは法師功德品である。それはこの品が五種法師を行なう人の功德を挙げて、六根が清淨なものとなり神通を得るに至ることを示したものだ、という点に由来するからである。そこで、第一に五種法師とは何なのか、この品の説示を挙げて整理してみたい。

六根の清淨を説く法師功德品は六段の構成をもって、語られているが、その第一段では、  
受持是法華經。若説若誦若説若書写。

となつておつて、受持・説・誦・解説・書写の五種法師の明瞭な記述を見ることが出来るが、これに対する梵文は  
*imam dharma paryāyan dhārayisyati vacayisyati vā deśayisyati vā likhisyati vā*

と、四法行を示すのに留まっている。こゝでは妙法華経が、*vā*の一字をもつて、説・誦の二つの行為を示すものと理解したというように考えられる。そのことは正法華経が

受是經典持誦書写……

と、説の一行為だけを示していることでも明らかである。即ち、こゝでは「誦」というものはない。従つて四法行

であった、ということになる。

そして、第二段では

受三持此経。若読若誦若解説若書写。

*imaṃ dharma pariyāyaṃ saṅghaparakāśyamānāṃ parisaṃ ca saṅghāvayamānas*

と、妙法華経の五種に対し、梵文には解説にあたる<sup>と見うる</sup> *saṅghaparakāśa* があるだけであって、正法華経も説是經典。若為異教類声聞乘説者。

と、解説だけを訳出して梵文に忠実な態度を保持している。しかし、この品は五種法師を行ずる人は六根を清浄ならしめるとの説示をなしたものであり、この第二段は耳根の清浄を説いているので、当然、この箇所も五種を行ずれば、との内容によって語り出されたものであろう。妙法華経の達意訳はその点で必須のものであったとも云えよう。

第三段は

受三持是経。若読若誦若解説若書写。……(妙)

有持是経卷分別説者。若復諷読書著竹帛。……(正)

*imaṃ dharma pariyāyaṃ dharayatāḥ prakāśayatāḥ svādhyāyato likhito*

であるが、(こゝで)第一段の *vāca* にかわって *svādha* が登場して来たことが異っている。

第四段は

受三持是経。若読若誦若解説若書写。……(妙)

其有持是經典説誦書写。……(正)

imaṃ dharma paryāyaṃ dhārayamāṇo eśayamāṇaḥ perakāśayamāṇo likhamāṇas  
て、解説の項と思われるものに、 prakāśa deśa 〇二〇の語が登場して来ている。

第五段は

受持是経。若説若誦若解説若書写…… (妙)

若聞是経持説誦写…… (正)

imaṃ dharma paryāyaṃ dhārayamāṇo vā vācayamāṇo vā prakāśayamāṇo vā eśayamāṇo vā likha  
māṇo vā

であるが、こゝでは再び vāca が登場して来ていること位が相違点であろう。

最後の第六段では

如来滅后受持是経。若説若誦若解説若書写…… (妙)

如来滅度后。若持斯経誦説解説…… (正)

tathāgāte parinirvṛta imaṃ dharma paryāyaṃ dhārayato eśayataḥ saṃprakāśayato likhato vācay  
atas

と、如来滅後の句がつけ加えられて来ている以外、他の場合とめだつた相違はない。

そこで、これら六段に分けられた言葉の使用され方を、妙法華経の五種法師にわけてあてはめると次のように  
なる。

五種法師名	梵文語根	和訳	梵文使用回数
受持	dhṛ	保つ	五回
誦	vāc	話す	三回
誦	svādḥ	暗誦する	一回
解説	(pra) kas dis	解説する 示す	五回 三回
書写	likh	書く	五回

即ち、六段にわかれている法師功德品としては、五種法師が六回示されるのが至当であろうが、梵文では dhṛ, kās, likh が五回使用されたのが最高であり、更に、問題を含んでいると思われるものは、妙法華経の解説にあたるものとして、 kās, dis の二語が示されていることと、誦の訳語にあたる言葉として svādḥ が一度示されただけである、ことである。

この五種法師の該当箇所で使用される kās は、厳密な意味では接頭語を付された prakās であるが、仮りに訳例を示すと appear, become, manifest, make visible, display, etc. であり、dis の方は show, direct, command, produce, etc. である。この両者は同じような内容のものに見えるが、 prakās はものの理を註釈するような意を含めているが、 dis は説きひろげてより多くの人にそれを見せよう、というような意がこめられている。しかし、

この品において、この両者の使用例に相違があったとすることさりのものは見当らない。

そして、*vac* はものを話すこと、読むことを示すのに対し、*svadh* は暗誦することを示すものであるから、誦誦の語を誦と誦の二つの別のものとして考えるならば、この *svadh* が誦で *vac* を誦として考えるべきだろう。正法華経が *svadh* の出て来る第三段の訳文を有持是経卷分別説者。若復諷誦書……となしているのも、この語を諷誦と解したからであろう。しかし、この語がこの法師功德品において、一度しか使われておらないが、これにはどのような理由があるのだろうか。これを解明するためには、他の品における五種法行の項を見なければならぬだろう。

このような点から、この品では妙法華経の五種法師に対し、梵文では六種類の言葉をもって五種類のもものが説かれており、しかも、それは解説にあたると思われるものが二語となっていることを知ることが出来る。

3

法師功德品と並んで五種法師がくり返し説かれるのは、法師品であるが、これはこの品が法華経を弘通する人に及ぼされる功德を説示したものであるからだろう。

その第一段長行の中には、仏が法華経の一句一偈を出いて随喜する人に悟りの記別を与えると語った直後に、次の如く説かれる。

受<sub>二</sub>持<sub>一</sub>誦<sub>三</sub>誦<sub>四</sub>解<sub>五</sub>説<sub>六</sub>書<sub>七</sub>写<sub>八</sub>妙法華経乃至一偈……(妙)

従是經典受持一頌。諷誦書写載於竹帛。銘著心懷念而不忘……(正)

ya ito dharmā paryāyād antaśaś eka gāham api dhārayisyanti vācayisyanti prakāṣayisyanti  
saṃgrāhāyisyanti likhisyanti likhivā cānusmarisyanti kalena ca kalam vyavalokayisyanti

すなわち、妙法華経で見る限り、たしかに五種類の法行で、このあと続いて示される供養を加えても六種法行であるが、正法華経は、受持・諷誦・書写と、心に銘著し念を懐いて忘れずというのがあり、梵文では、供養を加えないで七種類の行いの形を数えることが出来る。それをかりに五種法師に配当してみると、

(妙)		(正)	
受持	dhāraṇīyanti	受持	
読・誦	vācayīyanti	諷誦	
解説	prakāśayīyanti		
書写	likhīyanti	書写	
	saṃgrāhāyīyanti		
	likhītvā anusmarīyanti	銘著	心
	vyavalokayīyanti	懷念	而不忘

で、漢訳両経と梵文とで夫々に相異が多いように思われる。そして、両漢訳の中に見られないものは *saṃgrāhāyīyanti* であるが、この言葉は掴まえるという意味をもっておるところから、受持と同一内容と判断せられたものかもしれない。そして、*vācayīyanti* を妙法華経は読と訳し、正法華経は諷誦と訳している。諷誦は本来は誦にあてはまるものだろうが、その誦に対する梵文が見当らないのもおもしろい。その理由は何だろう。更に、正法華経の銘

著心懐念而不忘の訳語となった二つの梵文は、五種法師の型にあてはめることは困難なように思われる。これについて、法華縁成立史は、こゝではこの二つのものが、余り必要でないのみか訳文が煩瑣になる故に、訳出の際に省略したものとされる見方もあるが、何か簡潔なものに統一したがる便宜的なものがあるようにも思われる。(P一五〇)とのへている。更に、この長行に引きつゞいてくり返し語られる箇所では、

受持説誦解説書写。種々供養養卷。……(妙)

其受是經持説誦写。觀聽供養……(正)

ya inraṇ dhārma-paryāyaṇ sakala-samāptam udgrhṇīyād dhārayed vā vācayed vā paryavāpnuyād  
vā prakāśayed vā likhēd vā likhāpayed vā likhivā cānusmaret tatra ca pustaka-……pūjanām.

となつてゐる。これを前掲の箇所と比べてみると

dhārayisyanti	dhārayed
vācavisyanti	vācayed
prakāśayips yanti	prakāśayed
likhisyanti	likhēd
saṃgrāhāyisyanti	udgrhṇīyād
likhivā anusmarisyanti	likhivā anusmaret
vyavalokayisyanti	paryavāpnuyād
	likhāpayed

となる。

この両者の内、上段の方は動詞の使役形の単純未来の三人称複数能動態であり、下段の方は使役形の願望法の三人称単数能動態を示している。従って、前者は「……せしめるだろう」と訳し、後者は「……せしめたい」と訳すべきであろう。しかし、この点の相異を除けば、この両者は割合に似通っているといえる。

そして、第二段の長行には

如来滅后。其能書持読誦供養為<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>説者。……(妙)

仏滅度后。若有信此正法典者。受持書写供養奉順為<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>説。……(正)

の語がある。これに対する梵文は

ya imaṃ dharmā paryāyaṃ tathāgatasya parinirvṛtasya śraddadhīṣyanti vacayīṣyanti tīkṣīṣyanti  
sat-karīṣyanti guru-karīṣyanti pāreṣaṃ ca saṃśrāvayīṣyanti

となっている。

即ち、妙法華経が五種法師の説示の順序を替え、訳語にいさゝかの手を加えただけであるのに対し、梵文には従来掲げて来たものとは全く異なる言葉が登場している。

śraddadhīṣyanti, sat-karīṣyanti, guru-karīṣyanti saṃśrāvayīṣyanti の四つは今までの箇所ではとり挙げられなかったものである。これをもって、受持・読・誦・解説・書写とあてはめて行った妙法華経は、全くの意識であった、といえるであろう。しかし、信ずる (śradda) の心は、經典を受持読誦解説書写する人にとっては必須条件であるといわなければならないから、定まりきったこととして省略したものかもしれない。そして、そういう

点からは他の三語の訳文についても同様のことが考えられる。

又、この箇所のおくあとの、

在々処々。若説若説若誦若書。若經卷所住処。皆応起七宝塔。……(妙)

若有能説斯經訓者書寫見者。則於其人起仏神寺。……(正)

yasmin pṛthivi pradēṣe 'yaṃ dharmā paryāyo bhāṣyeta vā deśyeta vā jīkhyeta vā svādhyāyeta

vā saṅgāyeta vā tasmin Bhāṣeṣyārāja pṛthivi pradēṣo talhāgata cariyāṃ kārayitavyaṃ……(梵)

にては、三經共に五種法師の中の受持を欠いていることと、暗誦・(svādḥ) 誦誦 (saṅgai) の二つが示されていることが注目されうる。そして更に、この文章は法行がそのまゝ、cariya 建立思想につながっていることを示している。そして、

有説此經法之處。諷誦歌詠書寫。書寫已竟。竹帛經卷當供養事……(正)

yasmin pṛthivi pradēṣe 'yaṃ dharmā paryāyo bhāṣyeta vā deśyeta vā pāhyeta vā saṅgāyeta vā

jīkhyeta vā likhito vā pustaka gatas tiṣṭhet……(梵)

は前述の文章のくり返しと思われるが、こゝにては pāhyeta の語がはじめて登場して来ている。しかし、この箇所の全文は妙法華経には見出すことが出来ない。くり返しの故に省略したものであろうか。

法師品はこのような展開をたどった后で、

多有人在家出家行菩薩道。若不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見聞誦<sub>レ</sub>誦書持<sub>レ</sub>供養是法華經<sub>二</sub>者。……(妙)

多有菩薩出家為道。及凡白衣行菩薩法。不能得致如是像經。及見誦誦書寫供養。……(正)

bahavo gr̥ha s̥hāh pramrajiās ca bodhisattva caryaṅ caranti na ca punar imaṅ dharmā paryaṅ  
 jabhante darśanāya vā śravanāya vā likhanāya vā pūjanāya vā

と示して、五種法師にふれていることを示している。

しかし、この法行に言及するところは、法師品にても以上掲げただけに留まるものではない。五種法師のうちの一つだけを示す箇所は極めて多くの場面に及んでいるからである。しかし、五種法師という時、それは五種類の法行があることを示している。そこでこの場合、五種近くに整理されているものを見て来たのであるが、先の法師功德品にならって、法師品における言葉のあり方を整理してみると、それは次の如くなるであろう。

五種法師名	梵語々根	和訳	梵文使用回数
書写	likh	書く	六
読(誦)	vāc	語る	三
供養	pūj	供養する	三
受持	dhṛ	たもつ	二
解説	kās	解説する	二
	smṛ	記憶する	二
	śru	聞く	二

	解說	gai	うたう	二
	解說	bhāṣ	話す	二
	解說	dis	示す	二
		lok	見る	二
		śrad	信ずる	一
	誦	svadh	暗誦する	一
		path	導く	一
		drś	見る	一
受		grh	つかまえる	一

この小論でとり上げた箇所は法師品の六ヶ所であった。しかし、妙法華経だけは、その中の一箇所に訳文がないので五箇所であった。したがって、六回の使用例も五回の使用例も妥当であろうが、この表で見ると通り極めて分散しており、かつ極めて雑ばくで整理してみることすら不可能である。このようなあり方は、法師功德品の形と比較してみると、全く異質のものだといわなければならないであろう。このような両者の大きなちがいの理由はどこから由来して来たのであろうか。

こゝで、今までにとりあげて来た法師品と法師功德品の説示について、もう一度ふり返ってその要点をまとめてみると、次のようなことを指摘することが出来る。

妙法華經の五種法師の訳語に対する梵文は、決して五種類ではない。しかし、法師功德品に見ることの出来る梵文ではその表で見るように、ある程度きまつた言語をもって説示されているが、法師品の場合の梵文は、多岐に亘っており、それは一定の型に整理統一することすら不可能なほどに思われる。

法華経をひろめようとする法師について言及し、その法師の功德をたゞえようとしている両品の表現が、これ程に相異している理由は、その成立年代の相異だとか、創作者たちにちがいがあつたのか、というような成立時に、問題の所在があるのではなからうか。

そこで、この問題について掘り下げるために、五種法師の言及される他の章の部分を見ることにする。

## 5

分別功德品は如来寿量品のあとをうけたものであることは、その説示から明白なことであるが、第三段長行で如来の寿命長遠の教えを聞いて信解することを述べる中に次のような文章がある。

広聞<sub>三</sub>是經。若教<sub>レ</sub>人聞。若自持若教<sub>レ</sub>人書……(妙)

其聞是經。即持書写已。載於竹帛供養奉持……(正)

ya imam evaṃ rūpaṃ dharma pāṭyāyaṃ śṛṇuvāc chrāvayed vācayed dhārayed vā likheda vā  
likhāpayed……

これは四偈の第三の広為他説のところの文章であるが、こゝには聞法と受持と書写とが説かれている。聞法が法

行の一つであるとする説示は別のことにして、この三法行がすべて自の行いであると共に、他の人にもそれと同じことをさせるべきものであるとの立場をもっていることを知りうる。そして、この「他人のために」という説示は法師功德品には見られなかったところであり、わずかに法師品の第二段長行に爲他人説が見えるだけであつて、特異とすべきことであろう。この三法行に対して梵文は *śru* と *vac* と *dhṛ* と *likh* の四種をあげている。これで見ると妙法華經の訳出した自己の行と他人のための行いという二種のもものは *likh* (書写) 以外にはないことと、梵文には妙法華經にない *vac* (説) があることを知りうる。

更に、この説示に続いて五品を説く箇所には次の如き文がある。

説誦受持之者斯人則爲頂<sub>ニ</sub>載如來。……受<sub>ニ</sub>持<sub>ニ</sub>説<sub>ニ</sub>誦<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>典<sub>ニ</sub>者……(妙)

歡樂受持。則爲如來所見擁護。……(正)

*ye dhārayisyanti vācayisyanti | tatas tatthāgataṃ so 'ṅsena pariḥarati ya imaṃ dharma pariyāyaṃ*  
……*kṛtā me ten*……

こゝにおける説誦・受持の云いなおしは妙法華經のみのことであり、しかも、説誦が *vac* の語から訳出したもので、説と誦という二つの法行を意味するものでないことを示している。

聞<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>經<sub>ニ</sub>典<sub>ニ</sub>。有<sub>ニ</sub>能<sub>ニ</sub>受<sub>ニ</sub>持<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>教<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>書……(妙)

有得聞此經典者。持説書写若分別説……(正)

*ya imaṃ dharma pariyāyaṃ parinirvāṣya dhārayitvā vācayitvā likhitvā prakāśayitvā vihāra*

この説示は五品の第三である説法品において語られたものであるが、妙法華經が受持と自書と教人書とを挙げてい

るのに対し、正法華経は受持・誦・解説・書写の四法行を挙げてゐる。そして梵文法華経は *dhṛ* と *vac* と *likh* と *prakāś* の四行を示している。このあり方は正法華経の訳出と全く同一なことであり、妙法華経は意識をなしたといえるであらう。

しかし、同じ説法品の末において語られる箇所では、

若<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>受持誦誦為<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>説。若<sub>レ</sub>自書若<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>人書<sub>レ</sub>……(妙)

*dhārma paryāyaṃ……dhārayed vā vācayed vā deśayed vā likhēd vā likhayed*

となつておつて、正法華経の訳文は見当らない。妙法華経はこの箇所の冒頭の文と異つて誦誦と為他人説(解説)とが加えられており、梵文法華経では *prakāś* のかわりに *deś* が使われ *likh* は *likhēd* と *likhayed* の二つにわけて説示されていることを知りうる。

更に、正行六度といわれるところでは

若<sub>レ</sub>人説<sub>二</sub>誦受持<sub>一</sub>是<sub>レ</sub>経<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>説。若<sub>レ</sub>自書若<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>人書<sub>レ</sub>……(妙)

*imaṃ dhārma paryāyaṃ dhārayed vā vācayed vā deśayed vā likhēd vā likhayed vā*

となされている。こゝにても正法華経の訳文はないが、妙法華経の訳文は、この前のところと殆ど同様であるといえるし、梵文法華経も *dhṛ*, *vac*, *deś*, *likh* (願望と使役の両者)であつて、前文と同様であるといえよう。

更に、長行の末尾のところには

我滅后……受<sub>二</sub>持<sub>一</sub>誦<sub>二</sub>誦<sub>一</sub>是<sub>レ</sub>經典<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>……(妙)

*dhārma paryāyaṃ tathāgataṣya parinirvāṣya dhārayata……*

とある。妙法華経は受持・読誦となしているが、梵文法華経では *dhṛ* の一語のみで、正法華経には訳文すらない。何  
 度もくり返された内容であるので、法護は訳出せず、羅什は意識したのであろうか。  
 そこで、従前によってこれを表につくると、左のようになる。

五種法師名 (含漢訳文)		梵文語根	和訳	梵文使用回数
受持	<i>dhṛ</i>	たもつ	六	
読(誦)	<i>vac</i>	話す	五	
解説	<i>kaś</i>	解説する	一	
	<i>des</i>	示す	二	
書写	<i>likh</i>	書く	四	
教人書	<i>likh</i>	人をして書かせよ	三	
教人持			一	

これは分別功德品の中の六箇所の文章をとりあげたものであるから、この表は受持 *dhṛ* がいつもとりあげられていたことを示している。これはこの品が如来寿量品の教えを信解することを強調している立場上、当然なことといえるかもしれないが、逆にそれ程に受持が法華経信解のあり方の上から大切な要点を占めていることを知るべきであろう。受持一行という信行のあり方は、必然的に法華経経典から生み出さるべきことであろう。

そして、前掲の二品になかった教人書という方がとりあげられたのはこの品の特徴でもあった。多数の人々に法華経が保たれなければならない、法華経々典の多くをこの世にのこし伝えなければならない、とする意欲がそこからは感じられて来る。更にもう一つ、法師品の説示に比べて随分と内容に整理がほどこされて来ていることである。しかしこの整理も法師功德品と比べる時に未だ未整理の感なきにしもあらずではある。このような点から考えると、この品は前二品の中間に位すべき成立になるのだろうか。

6

常不軽菩薩品の長行の末尾の中に次のような文章がある。

於<sub>二</sub>如来滅後<sub>一</sub>常<sub>六</sub>應<sub>六</sub>受<sub>三</sub>持<sub>三</sub>誦<sub>三</sub>誦<sub>三</sub>解<sub>三</sub>誦<sub>三</sub>説<sub>三</sub>書<sub>三</sub>寫<sub>三</sub>是<sub>三</sub>經<sub>一</sub>。……(妙)

如来滅后其受斯経。持誦誦読得福如是……(正)

*dharma pariyāyo badhisattvair mahasattvais tathāgate parinirvṛte 'bhikṣaṇam dhārayitavyo*

*vācayitavyo deśayitavyaḥ saṃprakāṣayitavya*

妙法華経は五種法師の全てを並べているが、正法華経は受持・誦誦・説・得福をあげ、梵文法華経は *dhṛ vac diś* 等の四つをあげるにとどめている。このことは、この両経には妙法華経にある書写行が示されていないことを語っていることになるであろう。そして、妙法華経の説・誦に対して正法華経も誦誦・説と訳しているが、梵文は *vac* の一語であって異っており、妙法華経の解説についての正法華経の訳文はないが、梵文は *diś* と *kāś* の二つを説いていることを知りうる。

更に、如来神力品の冒頭には

受持誦解説書写。……(妙)

若有受持此妙典要。講誦書写為人説者。……(正)

*dharmā paryāyena dhāraṇāya vacanāya desanāya samprakāśanāya vā likhanāya*

という言葉がある。ここでは妙法華経の五種に対して、正法華経は講誦となし、梵文法華経は *vac* をあげるのみで、両者共に妙法華経の誦を欠いているということが出来るであろう。

そして、別付属といわれる後の説示でも、

応一心受持誦解説書写如説修行。……若有二受持誦解説書写如説修行。……(妙)

当以慇懃求此經典。受持書写精進奉行。供養承事為他人説。設使有人。齊此經行講讀書写。……(正)

*dharmā paryāyo dhārayitavyo deśayitavyo likhitavyo vācayitavyaḥ prakāśayitavyo bhāvayitavyaḥ*

*pūjayitavyaḥ……vācyeṭa vā prakāśyeta vā deśyeta vā likhyeta vā cintyeta vā bhāsyeta vā svādhyā-*

*yeta va……*

とあって、妙法華経のみが誦を加えておるが、正・梵経共に誦を語ってはおらない。そして、梵文法華経は妙法華経の解説について *dis* と *kaś* の二つの語をもって説示を展開していることで、常不軽菩薩品と同様の説示を知ることが出来る。

この両品にみられる説示によると、

五種法師名

梵文語根

和

訳

梵文使用回数

受持	dhṛ	たもつ	三
誦(含誦)	vac	話す	四
解説	dis	示す	四
	kaś	解説する	四
書写	likh	書く	三

であって、こゝからは五種法師の中の誦が独立した法行として考えられておらなかったのではないかということと、解説と考えられる言葉には *dis* と *kaś* の二つの言葉があるということが明白である。

この言葉のうちのどちらかを誦と訳したのだろうか、とも考えられるところだが、どちらも明示する、示す、明白にするとかの意であって、誦するというような意はないようである。しかし、何故に二つのちがった言葉で語られながら、羅什は解説の一語だけですましてしまったのだろうかとの疑問も生ずる。

7

以上、法師品・分別功德品・法師功德品・不輕菩薩品・如来神力品と五品にわたって、妙法華経に五種法師乃至それに関する部分が説かれているのを梵文法華経の中に見て来たのであるが、こゝで各品に説定した表を見てきわだちたがいが、そこにあることを指摘することが出来る。

第一に五種法師といわれる五種の法行の型態としては、法師功德品が最も完成され、ついで如来神力品であり、分

別功德品であり、そして、不輕菩薩品の順で整理されているといえるが、法師品においては全くその法師の行の型を規定することが困難である、といわなければならないであろう。

第二に五種法師の中の誦法行についてであるが、誦にあてはまる言葉 *śāstra* が説かれているのは法師功德品の一ヶ所と法師品での一ヶ所とを数えるのみである。このことは、妙法華経において誦・誦と二つの法行として説かれている法行が、梵文では一つの法行として考えられていたことを示すのではなからうか。第三に解説行については、*dis* と *kas* の二つの法行が梵文では示されている。そして、その両語が使用されたのは全部の品にわたり、どちらも同じような使用例である。このことは、梵文ではこの二つの行をちがうものとして理解していたのか、更に意を強めるためにいい直しをしていたのかになるであろう。

第四にこれらの法行が語られる言葉は、使役形が使用されている例がほとんどの場合であるということである。このことは、自己が行うことは勿論、自己以外の人にこれを守らせることに、法華経の主意がおかれていたことを示すのではなからうか。

以上のような点から、梵文法華経においては、法華経を受持し、その心からこれを広宣流布するための行いが強調されて来たものではなからうか。そのために、誦誦や解説や書写が説かれたものであろう。そして、この四法行にまとまりを持つまでには、法華経のための故に、種々のものが説かれて来たものではないだろうか。その過程が、法師品を最右翼とする法行の多岐多様の姿なのだろう。これは逆に考えると、この五品が成立した過程を示すものともなるだろう。中でも法師品は他の品よりはかなり古い時代に作成されたものを示しているのではなからうか。妙法蓮華経はその訳出にあたって、最切から法行の種類を考えており、多岐にわたった法師品の法行を簡明に表現し去ったも

